

夢を見る場所

松井先輩のアトリエ「ル・レヴェイユ」を訪ねて（その1）

関東支部 雨宮(敏)

4月24日午後2時、京急杉田駅から息を切らしながら坂道を登ること15分、視界が開けた坂の途中に、横浜から房総、横須賀の海を一望できる絶景のアトリエが現れた。昭和シェルOB美術部の最長老の松井先輩が構えるアトリエ「ル・レヴェイユ(夢を見る、途方もないことを考える…の意)」(※1)である。

この地は先輩が若かりし頃に手に入れた山林だったという。以来30年、サラリーマン生活の傍ら、自らの手で斜面を切り開き、整地を続けてこられたということであった。昭和の終わりに退職金をつぎ込んで建てられたこの夢のアトリエは、資金の不足分を補うために、照明や壁紙など内装の細部は先輩自身の手によるもので、驚くべきことに、その造作は今も「未完成」なのだという。



松井さんの「ル・レヴェイユ」を描いた絵との対話



玄関を入るとすぐに目に入ってきたのは廊下や部屋全体に、所狭しと飾られた大小さまざまな絵画や彫刻であり、家の内部全体が美術館の様であった。アトリエは、天井も高く、中二階の部屋もあり、その内部に数多くの絵画、そして整理された膨大な作品群を目にした。そこには長い年月の試行錯誤と、生活と芸術が分かちがたく溶け合った気配が満ちていた。銀座などでの個展も何度か重ねる一方、「全国旧制高校美術展」や「東工大 OB 展」、「虹の会」といった活動を今も牽引し続けているというお話には、脱帽するばかりであった。



今回の訪問で分かったことであるが、先輩は旧制浦和高校出身ということで、一緒に訪問した市川さんとは同郷であり、故郷の思い出から芸術の話まで、会話は大いに盛り上がった。見せていただいた作品一つひとつに宿る力強さは、ただの技術ではなく、理想の空間を自らの手で一歩ずつ手繰り寄せてきた、その生き様から溢れ出ているのかもしれない。



現在 98 歳にして「100 歳の時にまた個展を」と力強く語る先輩の傍らでは、今も奥様も共に絵画を描かれており、ご夫婦で芸術の道を歩まれる姿は実に瑞々しく、羨むほどに素晴らしく感じられた。以前は、お二人で絵画教室も開いていたということで、芸術に打ち込む情熱そのもののように、今もアトリエは変化し続けているように感じられた。

年齢を重ねてもなお衰えることのない情熱、創作を続けることの尊さと、共に夢を見続けることの美しさ、潮風の吹く高台のアトリエで私たちは芸術家の真髓に触れ、新たな気づきを持つことができた気がする。先輩が 100 歳で迎える次回の個展が今から待ち遠しい。何かすがすがしい充足感とともに、私たちは先輩の「夢見る」アトリエを後にした。

(※1)「アトリエ ル・レヴェイユについて」というレターを、訪問に先立ち松井さんから
お送りいただきました。

『昭和 34 年頃、京急杉田駅から徒歩 15 分、標高 36m の場所の森林 200 坪を手に入れた。アクセスは農道だけ。20 坪ほどの平らな場所に新居を建てた。建築資材はリヤカーに小分けして急坂の農道を押し上げた。周囲の山には山桜・椿・辛夷が自生し、棚田のせせらぎ、蛍・小鳥の声に癒される。急坂を10分も下れば、潮干狩り・海水浴・ボート遊びが楽しめる。家からは横浜・房総・横須賀の海が一望できる。

欠点は平地部分が少なすぎる。早速自主宅地開発を開始した。手段はツルハシと手押し車だけ、全ての余暇時間は硬い土削りに使われた。10 年程で約 60 坪の平地が出来たが、4 月の集中豪雨で 30 坪は消えてしまった。

昭和 45 年頃から、大資本による宅地開発が始まりインフラが整備され現在の様相を呈している。

昭和が終わるころ、サラリーマン生活が終わった。退職金が 700 万円残ったので、アトリエ建てることにした。設計どうりに仕上げるには。資金が足りない。職人には、構造の主要部だけを請け負ってもらい、内装その他は自力に頼った。未だに完成していない。

フランス語の *reveil* は夢を見る、途方もないことを考えるなどを意味する。
クロッキー、銅版画、シルクスクリーン等の会をもったが、今は休止している。』

(2026年6月)